育雛農家（いくすう）

育すうは、㈲川俣シャモファームと佐藤さんが携わり、雛がかえって1日目から28日目まで育て、その後、肥育農家に引き渡す。

人工芝などを入れた水洗槽で、長靴底の汚れを落としてから、消毒槽を通って鶏舎に入ります。

床の上に敷き詰めるもみがらは、菌の増殖や臭いの発生を抑え、熱を保ちやすいようにします。

餌付け用給餌器は、100羽あたりに1個設置します。深さのある給餌器には、徐々に慣らします。

育雛農家　佐藤　正範（まさのり）さん

「先祖代々の伝統を守り、地域活性化のために家族ぐるみで」

私の家では、代々闘鶏用のシャモを飼育していました。そのため、特産化の動きがあった昭和58年から声がかかり、父と母が川俣シャモの特産化に向け携わっていました。

私は、父の跡を継ぎ、約10年前から川俣シャモの雛の育すうをしています。どこかでいつか父の跡を継いで、代々受け継がれてきた伝統を継承する時がくると思っていたので、跡を継ぐことに抵抗はありませんでした。私自身も、伝統を絶やしたくないという強い思いがあったので、生涯現役で川俣シャモの育すうに携わり、伝統を守っていきたいと思っています。

また、跡を継いだのにはもう1つの理由があります。それは、生まれ育った川俣町のために、何かしたいという思いがあったからです。川俣シャモをつうじて、町を元気にし、農業を活性化させたい。思いは10年たった今でも薄れていません。

今年、新しく雛を育てる育すう舎を建設しています。たくさんの人に川俣シャモを知ってもらい、食べてほしい。大きい育すう舎で育てることで、温度と湿度管理がしやすく、これまで以上に質の良い雛を育て上げていきます。

「当時、町長に『川俣シャモは必ず成功する。信じてついて来てくれ』と言われたんです。諦めずにやって来て良かった。」と話す母のスミ子さん。

肥育農家

肥育農家は、29日目から110-114日目まで育て、その後、食鳥処理工場に引き渡し、処理され、振興公社で加工を行う。

20-35日目には「前期」と呼ばれるえさを使い、それ以降は「仕上げ」のえさを使っています。

寒い時期には、川俣シャモが寒さでストレスを抱えないように、暖を取れるスペースを作ります。

川俣シャモのえさは上から吊り下げられており、えさが減ると自動的に下に落ちてくる仕組みです。

肥育農家 菅野 清助（せいすけ）さん 由紀子（ゆきこ）さん

「これからも２人で力を合わせて生涯現役で川俣シャモを育てたい」

肥育を始めたのは、震災があった1か月前でした。右も左もわからない状況だったので、大変だったことを覚えています。しかし、夫婦二人で力を合わせてここまでやってきました。

川俣シャモの肥育を始めたのは、定年を迎える歳に、友人に誘われたことがきっかけでした。川俣シャモの肥育は、友人と現在、川俣シャモ振興会の会長を務めている佐藤治さんに教えていただきました。

「シャモが喧嘩して興奮している時は、青い電球を使ってやるんです。すると、川俣シャモが落ち着くんだよ。」と話す清助さん

川俣シャモの飼育は、自然と生き物が相手だからとても難しいです。愛情を注いで育てても思うように育たないこともあります。しかし、毛並みのいい健康的な川俣シャモであるために、試行錯誤しながら肥育を行っています。質の良い川俣シャモを育て上げた時、最高の喜びを感じます。

いつも、お客様に最高の川俣シャモを食べてほしい、という思いで肥育しています。質の良いシャモを育てるためには、一番にストレスなく育てることが大切で、たくさん声をかけ愛情を注いで育てます。川俣シャモにもそれが伝わり、鶏舎に入ると寄ってきてなついてくれて、何とも言えない可愛さを感じます。これからも、夫婦二人で協力して肥育していきます。